

神奈川 芸術プレス

vol.167

KANAGAWA ARTS PRESS

2025年(令和7年)9月24日発行



特集

未来をつくる人たちへ

WORKS 劇場留学～『モモ』と時間の旅～ モモ インタビュー：川口智子、『ふしぎ駄菓子屋 銭天堂』インタビュー：白石加代子

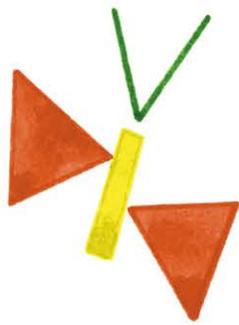
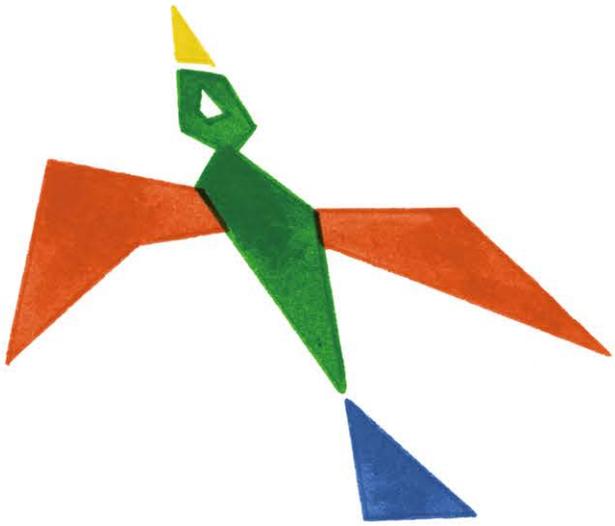
CASE 横浜美術館 子どものアトリエ、インクルーシブ・ベイビーシアター『かぜのうた』、音楽堂 小中高校生のための公開リハーサル、さかえdeつながるアート ティーンズクリエイション、KAATキッズ・プログラム インタビュー：大池容子

INTERVIEW 大崎清夏、片岡純也＋岩竹理恵

連載 アートシーンプレイバック、つなぐ——社会と芸術、公演の舞台裏



公益財団法人
神奈川芸術文化財団



WORKS

劇場留学～『モモ』と時間の旅～ モモ インタビュー：川口智子
リーディングドラマ『ふしぎ駄菓子屋 銭天堂』 インタビュー：白石加代子

08 CASE

横浜美術館 子どものアトリエ
インクルーシブ・ベイビーシアター『かぜのうた』
音楽堂 小中高校生のための公開リハーサル
さかえ de つながるアート ティーンズクリエイション
KAAT キッズ・プログラムの14年間 インタビュー：大池容子

14 INTERVIEW

大崎清夏(詩人)
片岡純也 + 岩竹理恵(アートユニット)

16 TOPICS

県民ホール 県域展開
音楽堂 先生のためのアウトリーチ

17 連載
REGULAR FEATURE

18 アートシーンプレイバック
2025年上半期のダンスプログラムをふりかえる
文：呉宮百合香(舞踊評論)

2025年上半期の音楽プログラムをふりかえる
文：八木宏之(音楽評論)

22 つなぐ——社会と芸術
文化による豊かな交流を——「チャレンジ・オブ・ザ・シルバー」ドイツに展開

23 公演の舞台裏
アクション編 前田 悟(アクション)

24 神奈川芸術プレス | 読者アンケート
ご支援のお願い
公益財団法人神奈川芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

公益財団法人 神奈川芸術文化財団について

1993年10月に設立された神奈川芸術文化財団は、以下3つの県立文化施設の運営と、芸術文化の創造・普及に一体的に取り組んでいます。



神奈川県民ホール(以下、県民ホール)
全国屈指の大型文化施設として1975年開館。オペラ、バレエからコンサート、美術展まで多彩な催しの会場として親しまれました。50周年を迎えた2025年に休館。現在は県内各地で「神奈川県民ホールpresents」と銘打った多彩なプログラムを展開しています。

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町3-1
TEL : 045-662-5901 (9:00~17:00)
<https://www.kanagawa-kenminhall.com/>

2025年度ラインアップはこちら
https://www.kanagawa-kenminhall.com/news_detail/2794



KAAT 神奈川芸術劇場



KAAT 神奈川芸術劇場(以下、KAAT)
2011年、モノをつくる(芸術の創造)、人をつくる(人材の育成)、まちをつくる(賑わいの創出)の「3つのつくる」をテーマとする創造型劇場として開館。最大約1200席のホールのほかに、大スタジオ(約220席)と、3つのスタジオを有します。

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL : 045-633-6500(10:00~18:00)
<https://www.kaat.jp/>

2025年度ラインアップはこちら
https://www.kaat.jp/news_detail/2759



木のホール
神奈川県立音楽堂



神奈川県立音楽堂(以下、音楽堂)
1954年、国内初の本格的公立音楽ホールとして開館。前川國男設計によるモダニズムの名建築、美しい音響の「木のホール」で知られ、数々の名演奏家を迎える一方、県民の音楽体験の場として愛されています。2021年神奈川県重要文化財指定。2024年開館70周年。

〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-2
TEL : 045-263-2567(9:00~17:00 月曜休館)
<https://www.kanagawa-ongakudo.com/>

2025年度ラインアップはこちら
https://www.kanagawa-ongakudo.com/news_detail/2805



写真：青柳聡



未来をつくる人たちへ

少子高齢化や異常気象など様々な課題を抱える現代社会。本特集では、これからの時代をつくっていく「子ども」を対象に含むプログラムを主に取材しました。これらの取り組みは、芸術文化にふれることで子どもたちの“そうぞう(想像・創造)”する力に働きかけます。一方、現場では、そんな子どもたちに思いを託す、主催者やアーティストなど大人たちの姿もまた印象に残りました。未来に関わるすべての人たちに、本特集をお届けします。

原作：ミヒヤエル・エンデ作 大島かおり訳 岩波書店刊『モモ』
copyright ©Michael Ende Estate(www.michaelende.de),
represented by AVA international GmbH,Germany(www.ava-international.de)

脚本・演出・美術：川口智子

振付：木原浩太

照明：横原由祐

出演：李そじん、荻本幸良、木原浩太、公募出演者



日程：3月28日～30日

会場：小田原三の丸ホール 小ホール

主催：市民ホール文化事業実行委員会・小田原市

WORKS

劇場留学『モモ』と時間の旅『モモ』

26人の公募出演者とプロの俳優やダンサーがともに熱演した「劇場留学『モモ』と時間の旅」。2025年3月に小田原三の丸ホールで上演された本舞台は、「劇場留学」と名づけられたプロジェクトの一環で、今回はその第2弾。市民、アーティスト、劇場が協働し、20回ほどの稽古を経て、3日間の本番を迎えました。公募には、小田原市民を中心に6歳～84歳までの様々な年齢の人々が参加し、観客もまた幅広い年齢層が集う舞台に。出演・観客ともに約半分は小学生～中学生くらいの子どもたち。脚本・演出・美術を手がけた川口智子さんに制作過程や「子どもが劇場で出会うもの」について聞きました。

聞き手・文：編集部

公演写真：ムービー&フォトスタジオ Every Moment



REPORT

2023年から小田原三の丸ホールで始まった「劇場留学」は、劇場でいろいろな人に出会い、「ちょっと特別」な体験をする公募参加型のプログラムです。今回は、振付家・ダンサーの木原浩太さん、俳優の李そじんさん、荻本幸良さんを迎え、プ

口とともにミヒヤエル・エンデの児童文学『モモ』を題材とした舞台を半年間にわたってつくり上げるといって、劇場作品を創作する過程にフォーカスした劇場留学となりました。

『モモ』は、廃墟と化した円形劇場に住み着いたモモという子ども、そのモモの大事な友だちとなっていく個性豊かなまちの人たち、そして人々から時間を盗む灰色の男たちが繰り広げる物語です。本舞台は、そんな物語の登場人物たちの魅力と、役を生き生きと演じる出演者一人ひとりの姿が見事に重なる活気あるものでした。

四方を観客が取り囲む舞台に、茶色いトランクを持った二人が登場。二人がトランクから出した一枚の大きな布に光を当てると、そこに劇場やまちの様々な建物が影絵で浮かび上がり、『モモ』のプロローグ部分の語りが始まります。そこから展開される、原作の世界観を浮かび上げさせるような演出は、まるで新しい読書体験のよう。『モモ』は52年前に書かれたものですが、時間の豊かさを失ってしまうというテーマは現代に通じ、今、その語りをあらためて受け止めた作品でした。

『モモ』を題材にしたのはなぜですか？

『モモ』は子どもには難しいのではないかと言われることもありましたが、きちんと一緒に紐解いていければ大丈夫だろうと思っていました。むしろ、エンデ作品は読み進めるうちに、読み手自身が物語

に登場する舞台のように設計されていて、それは子どものほうが上手に体験できるのではないかと。社会的なテーマがわかるかどうかではなく、「そこに人間がいて、その人がこれを言っている」ということを、子どもたちは素直に理解していくんです。

『モモ』の上演のなかで驚い

たのは、お話好きのジジが魔法の鏡の物語を話すシーンで、観客の小さな子どもたちの集中力がぐっと高まっていたこと。お話のなかのお話にすっと入っていく姿が面白いなと思いました。

私は劇場だからこそ子どもたちに出会ってほしいものがあります。それは、日常と実はすごくつながっているけれど、現実の世界ではみえにくいもの。『モモ』がテーマにしている「時間」は、生活のなかで常に意識していたら日常が成り立たなくなっちゃうけれど、劇場だったら時間をかけてその話をする事ができる。だから、私は出演してくれるみんなと、今、『モモ』の話がしたい。そしてそれを地域の方々に見てもらいたいと思いました。

今回、幅広い年齢層の出演者一人ひとりが、生き生きと舞台上に立っている姿に魅了されました。稽古はどのように進められましたか？

稽古は作品を完成させるためだけのものではなく、その時間そのものが出演者にとって豊かなものであってほしいと思っています。そんな時、子どもたちはある意味、演出家にとっても厳しいんです(笑)。大人はとりあえずつき合ってやろうという気持ちがあるけれど、子どもは途中でつまらなくなったら思ったままの反応をしますから。一方で、子どもたちはすごく優しくもあ

る。こちらがやりたいことを提案した時に、まず乗ってくれるのは彼ら。それに対して私もすかさず反応する。そういったやりとりを重ねていくことで、稽古という居場所がどんどん楽しくなって、お芝居が生き生きとしてくる。ただ、そういう環境にするためには、稽古場が「安心できる場所」であることが大事です。これまでも市民劇の演出に携わってきましたが、スケジュールの都合などで子どもと大人が稽古を別々に行うこともあり。でも今回は



川口智子 かわぐち・ともこ

演出家。地域のホールや自治体と協働し、劇場作品の創作・上演や、劇場・まちをテーマとしたワークショップを多数実施。近年の作品に、くにたちオペラ「あの町は今日もお祭り」(国立市)など。0歳からの「小さな劇場」や、「大人の読み聞かせ」などもシリーズで手がける。2026年1月には自身のプロデュースによる新作コンテンポラリー・バンク・オペラ「鏡の向こう見えない私の顔」の上演を準備中。劇場を第三者の文学の場所として問い直す。

公式サイト <https://www.tomococafe.com>



リーディングドラマ『ふしぎ駄菓子屋 銭天堂』

テレビアニメでも人気を博す児童小説を白石加代子主演で舞台化した、リーディングドラマ『ふしぎ駄菓子屋 銭天堂』。今年の4月から6月にかけて神奈川県内4ヶ所をはじめとする全国を巡演したユニークな舞台を、レポートと主演の白石加代子さんへのインタビューで紹介しします。

聞き手・文：鈴木理映子
公演写真：阿部章仁

REPORT

リーディングドラマ『ふしぎ駄菓子屋 銭天堂』は、県民ホールが企画制作した、語りと芝居が織りなす舞台作品です。原作は廣嶋玲子の同名人気児童小説。特別な力をもつ駄菓子を取り揃えた銭天堂には、日々、店主の紅子が回す福引に導かれた幸運な客が訪れます。

4歳以上が対象ということもあり、客席には親子連れの姿も多く見られました。白石の「語り」が、大原との「芝居」と絡み合い、さらに歌やダンスを織り込みながら物語世界を立ち上げていく、その過程を生る舞台で目撃できるのが「リーディングドラマ」の魅力。この体験はきっと年代を超えて共有され、記憶されていくことでしょう。

原作：廣嶋玲子『ふしぎ駄菓子屋 銭天堂』（偕成社刊）

出演：白石加代子、大原櫻子

台本・演出：笹部博司

ダンサー：蛸島由芽、村上生馬



日程：4月19日、20日

会場：神奈川県立青少年センター 紅葉坂ホール

主催：神奈川県民ホール

※そのほか、11ヶ所をめぐるツアー公演



舞台版は、銭天堂の客たちの摩訶不思議な体験を、3話にわたるオムニバス形式で描くものでした。1話目は泳ぎが苦手な女の子、真由美が主人公の「型ぬき人魚グミ」。グミのおかげで泳げるようになる一方、危うく人魚になりかける展開はファンタジックでありつつ不条理な怖さも感じさせます。2話目は「猛獣ビスケット」。意地悪な男の子、信也が、盗んだ駄菓子のせいで猛獣に襲われる場面では、二人のダンサーが動物に扮し、ダイナミックな身体表現を披露しました。3話目の主人公は、「おもてなしティール」を使って架空の茶飲み友だちとの交流を楽しむ40代の女性、みどり。最後の一杯が運命の出会いにつながる物語には、大人の



白石加代子



写真：菅原康太

——人気の児童文学が原作の舞台だけに、客席にもたくさんのお子さんの姿がありましたね。

お子さんたちはみんな観客としての態度も立派ですし、時々声を上げて笑ってくれたりするのを楽しんだり、何かハプニングが起こってもそれはそれでいいなとも思いつながらやっています。実は私自身は、舞台の上の間はどんな方がいらしているのか、それほどわかっているわけではないんです。元々、お子さんたちのように弱いもの、可愛いものは大好

き。だから、今回はかえって、

お子さんの可愛らしい声に引かれて、集中が乱れたりしないように用心して、気にしないようにしています。子どもって合わせようとするときに察知して、下手をするとこっちがばかにされちゃったりもしますから。

——『銭天堂』の舞台化は、企画の出発点から白石さんの紅子役が前提だったそうです。

今までやってきた役柄も、不思議な人や不気味な人が多かったですから、それがこの

役をいただくきっかけになっていたとしたら、ありがたいことです。紅子さんは銭天堂にやってきた人に対して、すごく手助けするわけでもないし、そもそも、そんな力もっていない。でも、そこがいいなど私は思っています。3話目のラブロマンスにしても、どこか思い当たるような物語でしょうか？ 私の知人は、どんな展開になるか想像がついていながらも、最後は涙したそうです。そういう、誰にもあるような思いを拾い上げる、ちょっとした魔法が素敵ですよ。

——『リーディングドラマ』という形式は、芝居としての躍動感と、原作小説の言葉や文体を聴く楽しみが絡み合う「発明」だと感じます。

片足は確にお芝居に踏み込んでいながらも、「本を読む」ことから足抜けはできない。だから、お芝居をしている間に、元の場所に戻れなくなったりしないように、本にはしっかりと「ここに居る」って印をつけておくようになっています(笑)。また、読むのは、

ほとんどが「地の文」になりますが、そこには作家の、神の力が宿っているわけです。だから、普通のお芝居とは違うつくり方をしなくちゃならない面もあります。それもまた楽しいけれど。

——白石さんは、「紅子」としてだけでなく、「語り手」としても舞台上の出来事に対してリアクションします。そこでの大原櫻子さんとのやりとりも、緩急自在で引き込まれました。

櫻子さんは、私がちょっと外れたことをしても絶対にカバーしてくれますし、お互いに作品の全体像をしつかり意識して取り組んでいると思います。櫻子さん、賢くて集中力があって、歌もうまいし、一緒にやって楽しいの。それと今回はダンスの場面もあって、言葉のない身体表現が、お話とお話の間をつなげてくれるのも、とっても素敵だなと思っています。

——今回の舞台は、紅子をラ

イバル視する「たたりめ堂」

のよどみが登場したところで幕を閉じます。ひよっとするとあれは次回作に向けた予告編でもあったんでしょうか。

言われてみればそうですね。あの対決の続きはどうなるの？(笑) 確かに今回の舞台はメンバーの熱も高くて楽しかった。ただ、次回作の実現は大変だと思います。だって、続編って最初の作品より面白くないといけないものではないですか？(笑)



白石加代子 しらいし・かよこ
1941年生まれ。67年に早稲田小劇場(現SCOT)に入団し、70年「劇的なるものをめぐってII」、74年「トロイアの女」などで世界80都市を巡演。ギリシャ悲劇公演で第1回鶴世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞。SCOT退団後は、映画やドラマなど映像作品にも出演。96年「百物語」、98年「身毒丸」で読売演劇大賞優秀女優賞、2001年「グリークス」で芸術選奨文部科学大臣賞、05年春の叙勲で紫綬褒章を受章。23年には演劇界初となる日本芸術院会員に選出される。

インクルーシブ・ベイビーシアター

CASE

『かぜのうた』

赤ちゃんと保護者が一緒に楽しむ、乳幼児のための舞台芸術「ベイビーシアター」。

欧米を中心に広がり、日本でも演劇や音楽、ダンスなどの多ジャンルの作品がつけられています。



構成・演出：くすのき燕
出演：大沢 愛
美術：大澤 直
照明デザイン：吉嗣敬介
日程：5月3日、4日
会場：川崎市アートセンター
小劇場
主催：川崎市アートセンター

ゴールデンウィークに川崎市アートセンターで上演された『かぜのうた』は、0歳～28ヶ月の乳幼児を対象にしたベイビーシアター。

赤ちゃんのみる力、きく力、かんじる力を信頼し、大人たちもともに楽しむ空間です。

この日も何組もの家族が劇場を訪れていました。

聞き手・文：河野桃子
公演写真：Eightree

『かぜのうた』は、前半は日本のわらべうたあそび15分の「あそび時間」、後半は本編20分の「みる時間」で構成されています。企画・出演を担う大沢愛さんは「わらべうたを

通して、赤ちゃんたちの能力、人としての存在感を目の当たりにしました。わらべうたあそびの延長線上に、親も子も心の深いところで感じる世界があったらいいな、そう思って『かぜのうた』をつくりました」と言います。真つ暗ななか、ほんのりと照明がともる。そよぐ春風、夏の雨の匂い、すこしだけ冷たい秋風、冬じたくの寒空。劇場のなかで四季折々の変化が生まれます。子どもたちは、うっとりとした光を見つめたり、青い照明に「雨だー」と声を上げたり、舞台上上がって音の居場所を探す子まで。四季の移ろいに目を奪われていくのは子どもたちだけではありませぬ。大人からも「わあ」と声が上がります。

大沢さんがベイビーシアターに出会ったのは、ご自身の子育てが始まる時でした。親になったばかりの不安や自分自身の生き方に対する迷い、そんな気持ちも抱えていた当時、「ベイビーシアターは心を

解放し自分に立ち返る空間。今思うと、社会との接点だったのかもしれない」と言います。「いつか自分でもそういう場をつくりたい」。大沢さんがそう思いはじめてから10年後の2014年に『かぜのうた』は誕生しました。

出演者は大沢さん一人ですが、スタッフもともに場をつくる大切な存在。「あそび」のワンシーンでは川崎市アートセンターのボランティアスタッフが活躍します。作品のよくな柔らかな笑顔で大きな布を広げると、大人も子どもも顔を輝かせます。



表現教育研究所代表の大沢愛さん

また、川崎市アートセンターではサポートや配慮が必要なお子さんが安心して参加できる「リラククス公演」をもうけています。「すべての赤ちゃんが当たり前にベイビーシアターを体験できる世の中になるといいですね。赤ちゃん——小さな人にも人格と人権があり、全身で感じる力をもっている。そんな意識を大人たちがもっていたら、社会はより良くなるでしょう。2022年に発足した、一般社団法人日本ベイビーシアターネットワークも4期目を迎え、徐々にその輪が広がっています。小さな一歩に大きな願いを込めて、ベイビーシアターを届けたいと思っています」。

CASE 音楽堂 小中高校生のための 公開リハーサル

聞き手・文：猪上杉子
写真：大野隆介

神奈川県立音楽堂では、
神奈川フィルハーモニー管弦楽団（以下、神奈川フィル）の協力のもと、
コンサート当日のリハーサルを
小学生から高校生の子どもたちに無料公開しています。
15年前から始まった事業で、年に3~4回実施しており、
100名限定の募集枠はほぼ毎回埋まるそう。



リハーサルを聴いたあとは、質問タイムが設けられ、神奈川フィルのスタッフが、
小中高生の幅広い興味に応じて丁寧に回答をします。

さらに、あとから寄せられた質問に対しても、
返答をホームページに掲載。

子どもたちへの熱心な対応がうかがえるこの企画について、
音楽堂と神奈川フィルの思いを聞きました。



5月24日開催「小中
高校生のための公開
リハーサル」の質問
回答ページ



神奈川フィルの常務理事・音楽主幹の榎原徹さん

さまに広く楽しんでいただく
ことが一番大事なことです。特に
子どもや若い層に、オーケス
トラを知ってもらいたい親しんで
ほしい。そしてぜひもう一回、
次は演奏会でオーケストラを
聴いてほしいと願っています」
（神奈川フィル・榎原さん）
「未来の聴衆、未来の音楽
堂ファンになってほしいとい
う希望があります。一度足を
運んでもらって、ここは大人
だけが楽しむ場ではないこと、
緊張する場所でもないことを
感じてもらいたい。音楽
堂の主催コンサートは高校生
以下無料（枚数限定）という
ことも告げ、子どもたちを歓
迎していることを知らせて、
いつかコンサートに足を運ぶ
大人になってもらいたいです」
（音楽堂・日下さん）

ある土曜日、音楽堂では15
時から神奈川フィルの「音楽
堂シリーズ（Classic Modern）」
と題する公演が行われる予定
です。11時30分からの当日リ
ハーサル（クラシック・ファ
ンは「ゲネプロ」と呼んでい
ます。ゲネラル・プロベ、つ
まり総稽古の略です）を無料
公開するとあって、応募した

大勢の参加者がホワイエ（ロ
ビー）に集まっています。
両親と一緒に小学生や、吹
奏楽部らしき楽器を抱えた高
校生たちという、広い年齢層
の子どもたちに向かって、神
奈川フィルの常務理事・音楽
主幹の榎原徹さんからリハー
サルの聴きどころが伝えられ
ました。
ホワイエから移動して行儀
良くホール後方の席についた
子どもたちの目には、カジュ

アルな服装の楽員たちが思い
思いに音を出している舞台の
風景が広がります。そこに登
場したのは今日のコンサート
の指揮者を務める野平一郎さ
ん。オーケストラと親しげに
少し会話をしたあとに、客席に
向き直って「今日演奏するラ
ヴェルの曲は」とやさしい
言葉づかいで解説をしてくれ
ました。
1曲目をすべて通して演奏
したあとに、野平さんから

オーケストラに対して、いく
つか——テンポについて／弦
楽器の弾き方について／管楽
器の奏法についてなど——の
指摘や再確認がありました。
指揮者とオーケストラの真剣
なやりとりの様子を垣間見る
ことができました。
2曲のリハーサルを聴いた
あと、ホワイエに戻った参加
者は、神奈川フィルの榎原さ
んに迎えられ、「どんなことを
感じたかな？」と感想や質問

をうながされます。まず手が
挙げたのは小学生たち。榎
原さんは吹奏楽部の部活動の
一環で参加していた高校生に
も声をかけます。また、この
場で手を挙げる活発な子ども
ばかりではなく、シャイな性
格だったり、ゆっくり考える
子どもへの対応もあり、あと
からも質問を受け付け、後
日ホームページにきめ細かく
的確な回答が掲載されます。
このような取り組みを長年
続ける意味を、神奈川フィル
の榎原さんと音楽堂のプロ
デューサーの日下郁さんに聞
きました。



質問タイムの様子。コンサートの内容から音楽堂の建物
についてまで、多様な質問が聞かれました

CASE

さかえdeつながるアート ティーンズクリエイション

聞き手・文：編集部

「さかえdeつながるアート」は、「ヨコハマアートサイト」(横浜市地域文化サポート事業)の一つとして2008

年に始まったアートプロジェクト。栄区内の施設や自然豊かな屋外空間、商店街などを舞台に、総合型アートフェスティバルから子どもを対象としたワークショップまで、幅広く地域とアーティストをつなぐ活動を実

施してきました。

ティーンエイジャーに向けた活動に力を入れるようになったきっかけは、2012年にヨコハマ創造都市センターで行われた「ポーランドポスター展」から栄区内の美術部の中学生が招待を受け、引率したこと。前代表の大塚宏さんは「栄区の生活を生かしながら地域の魅力をつくっていく手がかりとして、アート

を大事にしようと考えました。『生活を豊かにするためのアート』をキーワードにしながら、次世代にこれらの地域をどう委ねていくかを模索してきました」と話します。

そうして2014年に始まった「ティーンズクリエイション展」。2024年度は、創作舞台「Delete」とリンクさせ「内なる自分を探す旅―見えている自分と本当の自分―」をテーマに文化作品展示、ライブパフォーマンスを開催。318点もの作品が集まり、創作舞台には14名が

参加しました。これまでも脚本やチラシのデザイン、記録写真の一部などは中高生20代が担当してきましたが、2025年度からはこれまで大人が担ってきた運営の中心も、有志の若者約10名が行っています。うち3名はこう語ります。

「栄区青少年の活動拠点『フレンズ☆SAKAE』でこのプロジェクトを知り、参加するようになりました。ここは自分が変われる場です。私は元々人前に出るのは得意ではなかったのですが、活動を通して、どんどん楽しくなっていました。これからも自分の変化を楽しみたいです」(雨宮千佳さん)、「あたたかい大人が多くて、居心地がよい。講師との出会いもあり、プロの俳優を志すようになりまし

た。今年度はワカモノチームの代表をしています」(眞田瑞樹さん)、「カーテンコールの瞬間がやりがいです。運営に関わると自分で進められることも多く、ほかではあまりできない体験だと感じています」(加辺凜南さん)。

演劇経験がある人もない人も一緒になって一つの舞台をつくりあげるプロセスで、自分の表現ができるようになり、表情が変わっていく。現在の代表の岩上百合子さんはこう話します。「生きづらさを抱えたり、自分を表現する方法を探している子どもたちも地域にはいるので、家族や学校以外の人となることが重要。何かできることや好きなことが見つければ、生きていく力を得る機会にもなると思います」。

現在、「さかえdeつながるアート」は、アートや青少年に関わる活動に思いをもった40名以上のアーティストとつながりがあります。そのなかで、ティーンズクリエイションにも、10数名の人たちが、様々なかたちで関わっています。

横浜市栄区のアートプロジェクト「さかえdeつながるアート」から派生した「ティーンズクリエイション組織委員会」。
2014年に始まった、中高生世代中心の文化作品展示「ティーンズクリエイション展」を主催しています。



1月に上演された創作舞台「DeLeTe(デリート)#君と私が■された日」
現在は、12月6日の上演に向けて、2025年度の創作舞台を準備中! 写真: 深沢想太

2021年からは、中学生~20代を対象とした創作舞台の活動も開始。

演出家の指導や地域の大人たちの
伴走的なサポートのもとつくりあげ、
地域の施設で上演しています。



前代表の大塚宏さん(左)と現在の代表の岩上百合子さん(右)

2025年度は、これまで参加してきた若い世代が
運営の中心となり企画が進行。

若者が様々な表現方法を学び、実践する場となっています。



雨宮千佳さん(左)、眞田瑞樹さん(中央)、加辺凜南さん(右)

「まったく大きな声を出せなかった参加者が、まわりに励まされて、徐々に自信をつけ、声を出していく。人前で喋ったり、台詞を言ったり、それから表現したりということ積み重ねていく姿を見ていると、大きな成長を感じます」

初めての劇場体験を豊かなものにする

KAATキッズ・プログラムの14年間

KAATが開館した2011年から、
14年間続いてきた「KAATキッズ・プログラム(以下、キッズ・プログラム)」。
公共ホールが担う役割として、親子向けプログラムの枠組みをつくろうとスタートし、
現在は劇場のファンをつくるプログラムとしても大切な役割を担っています。

聞き手・文：編集部
写真：菅原康太(*を除く)



キッズ・プログラムが始まった当初から

長年企画に関わってきたプロデューサーの伊藤文一さんに、
親子で鑑賞できるキッズ・プログラムを続けてきた
劇場としての思いや、これからの展望を聞きました。

KAATキッズ・プログラム2025「わたしたちをつなぐたび」 *写真：西野正将

第一線のアーティストと、
子どものための作品をつくる。

開館当初から、作品を生み出す創造型の劇場というコンセプトを掲げてきたKAAT。親子が楽しめるキッズ・プログラムでも、舞台芸術の分野で、同時代において先鋭的な表現をしているアーティストと新作をつくってきたことで知られています。

色とりどりの演目が並ぶキッズ・プログラムの数々。これまでの思いを、プロデューサーの伊藤さんに聞きました。「キッズ・プログラムを観にきてくれる子どもたちにとっては、それが初めての劇場体験になる可能性があります。それをきっかけに舞台を嫌いになってしまいうようなことなく、劇場の「魔法」を体験して、また舞台を見たいと思ってほしいのです。だから私たちが考え得る限り、第一線で活躍しているアーティストに声をかけてきました。近年のキッズ・プログラムを手がけたアーティストには、演出家の加藤拓也さん(た組)、根本宗子さん、松井周さん、振付家では、森山開次さん、伊藤郁女さんといった、気鋭の方々の名前が

並びます。

キッズ・プログラムにふれた
子どもたちが劇場のファンになる。

KAATをはじめ、多くの公共劇場が子どもを対象としたプログラムに取り組んでいることは、年齢にかかわらずすべての人が舞台に親しむ環境をつくることにつながっています。キッズ・プログラムに長年携わってきた伊藤さんは、「キッズ・プログラムを小学生の時に見ていた方々が、例えば5年後にキッズ・プログラム以外のKAAT公演を見に来てくれたことをアンケートで知ることもありました。劇場のお客さまに



プロデューサーの伊藤文一さん

なってくれているのを感じます」とふりかえります。

KAATは子どもを対象としたプログラムをつくる時、子どもたちが一番きびしい観客だと思ってしまうかもしれません。つまらないと思ったら、子どもは席を立ってしまうからです。「子どもたちに70分間の舞台を見せるのは、ほんとうに難しい。ですので、必死になってあらゆる工夫を考えます。その工夫は、会場の構成、演出にも反映されています。キッズ・プログラムの会場は、舞台や客席を仮設で組むことができるKAATの大スタジオや中スタジオ。舞台と客席の境目をなくしたり、舞台を円形にしてまわりに観客が座ったり、サーカス小屋のようなテントのなかで公演をしたり……。アーティストの方でも、役者が客席に語りかけたり、クイズをしたり、ダンス公演では足踏みや身振り参加してもらったりと、客席を巻き込む様々な仕掛けをつくってきました。そのほか、よく知られている物語を題材にすることもあります。キッズ・プログラムでは『ピノキオ』『不思議の国のアリス』『くるみ割り人形』といった誰もが聞

いたことがある題材も扱ってきまし
た。もちろんアーティストとの相談
でオリジナルの戯曲を書いていただ
くこともありですが、題材は毎回
KAATから何らかの提案をしてい
ます」。

2025年度のキッズ・プログラム —SPACとの連携—

毎年キッズ・プログラムは、日本
各地の劇場へツアーを組んで発信し
ていくことを大切にしてきました。
その取り組みによって、全国の劇場
とのネットワークが生まれています。
その実績も踏まえつつ、2025年
度はSPAC・静岡県舞台芸術セン
ターとともにキッズ・プログラムを
企画制作する新しい試みが始まりま
した。7月から8月に、上演台本・
演出を大池容子さん（うさぎストラ
イプ主宰）が担ったKAAT制作の
『わたしたちをつなぐたび』と、構
成・演出を寺内亜矢子さんが担った
SPAC制作の『鏡の中の鏡』の2
作品を両館で同日上演しました。

最後に今後の展望を聞きました。
「大きなホールでの定番作品になるよ
うな創作にも取り組んでみたいで
すし、今年試みた複数の劇場と組んで
フェスティバル形式で上演する方法



KAAT キッズ・プログラム2024「らんぼうのめ」
*写真：宮川舞子

を、仲間を増やして拡大させていき
たい。これからもKAATならではの
キッズ・プログラムをつくってい
きたいと思います」。



KAAT キッズ・プログラム2023「さかまの世界」
*写真：金子愛帆

劇場のなかで完結しない演劇体験に

大池容子さんインタビュー

KAATキッズ・プログラ
ム2025『わたしたちをつ
なぐたび』。原作となった絵
本は、母と二人で暮らす少女
が、自分がどこから来たか、
そのルーツを動物たちとたど
る物語。現代の家族の多様な
すがたを、あたたかく描いた
作品です。上演台本・演出を
担った大池容子さんに、稽古
場でお話を聞きました。

「観客としていろんな作品を
見たKAATで、公演できる
ことがうれしいです。キッ
ズ・プログラムだからといっ
て、ただ易しいものをつくる

のではなく、子どもた
ちの想像力を信じて創
作をしています。本作
では一人の少女が、自
分のルーツや求めるも
のを見つめる旅をしま
す。大がかりな転換を
しなくても、旅の景色
を想像してもらう工夫
をしました」

舞台美術のモチーフ
となった「椅子」は、
原作者のイリーナ・ブ
リヌルさんが幼少期を
過ごした場所が椅子の
生産地として有名だったこと
からインスピレー
ションを得て
いるそう。



上演台本・演出を担った劇作家・演出家の大池容子さん(うさぎストライプ主宰)



歌のあるシーンを中心に稽古する出演者たち。
稽古場でもまるで冒険の景色が見えてくるような迫力！

家族のつながりを象徴するよ
うな椅子。いろんな場所へ冒
険する「ごっこ遊び」のイメー
ジとも結びつけながら、作品
を立ち上げていきました。
「今回、意識したのは「つな
がり」です。家族とのつなが
りや、大切な人とのつながり
、あるいは作品と観客をつなぐ
こと。演劇は作品を見ている
時間だけで完結するわけでは
ないので、劇場を出たあとに
大切な人の顔を思い浮かべて
もらえるような作品になっ
たらうれしいですね」

詩、小説、日記、絵本のほか、

脚本など舞台芸術の分野においても幅広く活躍する詩人の大崎清夏さん。

地域や生活のなかから生まれる言葉や

子どもが自分で選ぶことの大切さについて聞きました。

大崎さんは先日まで湘南地域で暮らしていたそうですね。

「ご縁があつて約9年間暮らしていました。環境が変わることで、創作に対する意識や言葉の選択に変化が生じることが実感できた日々でした。近所にある川沿いの遊歩道がお気に入り、そこを散歩していると、創作に関するひらめきが生じることが多かったですね。そのおかげもあって、こちらに滞在している間に詩作だけでなく、戯曲や小説など新しい分野にもチャレンジすることができました。この春、福島県の会津地方に転居したので、自分の創作活動にも、また新しい変化が生まれると思います。その変化をとっても楽しみにしています。」

詩作や戯曲など様々なジャンルで活躍されていますが、創作のプロセスは異なっているのですか？

やはりそれぞれに異なります。小説は詩と比べると一つの出来事についてゆつくり丁寧に描写できるので、そこが楽しく感じます。戯曲「うつつ・ふる・すず」（2023）は、石川県珠洲市でその地で暮らしている方に土地の物語や個人史を伺ってつくりました。自分の台本が、演者、演出、舞台スタッフなど数多くの人の仕事によって目に見えるかたちになり、できあがったものを観客の方が見る。こ

PROFILE

2011年、第1詩集『地面』刊行。
第2詩集『指差すことができない』で第19回中原中也賞受賞。
詩集に『暗闇に手をひらく』、小説やエッセイに『湖まで』『私運転日記』などがある。
協働制作の仕事に、
奥能登国際芸術祭パフォーミングアーツ「さいはての朗読劇」（22、23年）の脚本・作詞、
オペラ『ローエン格林』（24年）の日本語訳修辭など多数。



子どもには自分で選ぶことを大切にしてほしい

詩人

大崎清夏 Sayaka Osaki

の連関にとっても強く感動しました。

絵本の制作など、子どものための活動も精力的に行っていますね。

絵本は大好きで、ずっとつくりたかったんです。2冊目の絵本『うみのいいものたち』はビーチコーミングがテーマで、編集の方と近所の海辺を何度もウロウロして制作しました。子どもといえば、先日、大磯で開催されたブックマルシェのイベントに出店者として参加しました。その時、4〜5歳くらいのお子さまが一人でブースを回って、親のアドバイスを借りずに自分で読みたい本を選び、親に自分のことばで、本の内容やいかに読みたいものであるのかを説明し、親からももらった百円玉を握りしめて自分の手で購入する姿に立ち会いました。子ども時代、特に幼児期は与えられた本を読むことが多くて、自分で本を選ぶ機会がありません。その子にとっては、とても貴重な経験だと思いました。



大崎清夏『珠洲の夜の夢／うつつ・ふる・すず さいはての朗読劇』（2025年、twilight）

*1 浜辺に流れ着いた貝殻やガラスのかけら（シーグラス）などを収集したり、観察したりすること

今春、神奈川県立近代美術館鎌倉別館で個展「重力と素材のための図鑑」を開いた岩竹理恵さんと片岡純也さん。

平面に立体と絶妙なコラボレーションを見せる二人のユニットに、個展のことや子どものワークショップについてお聞きしました。

美術館での個展は初めてだそうです、どうでしたか？

岩竹 面白かったです。今回は美術館のコレクションと組み合わせだったので、いつもと違う制作の着想が得られました。特に日本美術の、掛け軸や屏風みたいな独自の形式とか構造に興味がありました。

個展の時はよく4章に分けます。最初は身の回りの「ささやかな気づき」から始まって、第2章が「日常と風景」。第3章は「身体の見立て」で、これは「内包される風景」と呼んでいるシリーズ。第4章は流動する「宇宙観」でマイクロとマクロの入れ子状態を意識しています。で、また日常に戻って1章から4章まで循環するような展示を構成しています。

片岡 私たちは展示する時、作品を1個ガツンと見せるのではなく、小さな作品で視座をつくっていくやり方をしています。

子どもが喜びそうな作品ですが、子ども向けのワークショップはあまりやらないんですか？

岩竹 今回はやってほしいと言われました。東京都現代美術館でやったのが初めてです。片岡さんの作品は子どもとおじさんと猫が集まってきました(笑)。

前に横浜の黄金町で子どもアトリエを手伝ったことがあるけど、メチャ面白かつ

片岡純也 + 岩竹理恵

Junya Kataoka + Rie Iwatake

アートユニット

大きな作品を1個見せるより、小さな作品で視座をつくっていく



PROFILE

身の回りのささやかな出来事を再現するキネティック作品と、印刷物から想像を展開した平面作品を組み合わせている。現在、BankART1929と協働しヨコハマポートサイド地区のプロジェクトで街のリサーチを行いながら、みなとみらいのシェアスタジオExPLOT Studioで制作している。

たです。特に5歳くらいの子がマスクキングテープをピタッと貼って「道になったよ」と。テープが道になったというのが大発見なんです。そういう瞬間に立ち会えたのはよかったです。

片岡 大きくなるとだんだん先生が喜ぶようなものをつくらうと思うようになりま

すね。

でも子ども向けはやっぱりとは思わない？

岩竹 片岡さんは日々そういう子どもみたいな発見をしています。

片岡 おれのが面白いぞって思っているし(笑)。

岩竹 神奈川県立近代美術館鎌倉別館でのワークショップの時は子どもが混じっていますごくよかったです。私たちは身の回りのものを使うので、知っているものが知らないものになるという感覚があつて、それを子どもはワーツという言葉に出してくれるんです。大人たちは黙っているだけだから、子どもが混じっている方がいいんです。



個展「重力と素材のための図鑑」の展示風景 (2025年、神奈川県立近代美術館鎌倉別館) 撮影: 高橋健治

聞き手・文: 村田 真 写真: 加藤 甫

県民ホール 県域展開



【ふしぎ駄菓子屋 銭天堂】で、ダンサーがご当地お菓子の紙袋を持って登場するシーン
写真：阿部章仁

今年4月に休館し、建て替えを計画している県民ホール。オペラやバレエ、室内楽、ダンス、ギャラリ―企画展、ワークショップなど、これまで行ってきた事業のノウハウを活かし、休館中は神奈川県内の様々なホールや施設などで事業を展開していく予定です。県民ホールはこれまでに県内の施設で、オペラなどの巡回公演を行ってきましたが、休館中は33市町村すべてに毎年行くことを目標に掲げています。プロデューサーの本目さんは、「よりよいから、それ地域の人のために、まずは各市町村

のホールや施設、自治体、地域団体などの人たちと関係性をつくり、協働して事業を行っていくことが目標の一つ」だと言います。「場所によっては、大きなホールがある地域、小さな施設しかない地域など様々。そこに県民ホール主催の企画をただ持ち込むだけでなく、その場所や住民のニーズに合った事業・公演を、各館や自治体の人たちと一緒につくっていきたくて思っています。皆さんとコミュニケーションをとりながら、それぞれの地域の人の声をしっかりと拾い、

文化芸術に対する思いを吸収しながらやっていく。それが県域全体の芸術文化、ひいては新しい県民ホールのあり方にも結びついていくと考えています」

さらに、この県域展開のなかで、県民ホールにとっては初の演劇作品にも取り組みました。「今年度は種まきです。これまでやったことのなかったジャンルも含めていろいろな企画を展開して、皆さんの声にも耳を傾けながら、次年度につなげていければと思っています」と本目さん。その第一弾として、リーディングドラマ『ふしぎ駄菓子屋 銭天堂』を企画し、全国でツアー上演しました。今後は、町役場や元布団屋さんなど、地域の特色ある場所で開催する写真展「カナガワポトガラヒー 出張浅田撮影局 一開成編／真鶴編」（12月）なども予定しています。



取材・文：編集部

神奈川県芸術文化財団が運営している県民ホールと音楽堂。

それぞれ、神奈川県全域に文化芸術を届けていきたいと、外に向けた様々な取り組みを行っています。

なかでも新しい試みがみられる事業について、

プロデューサーの本目久子さん（県民ホール）と日下郁さん（音楽堂）に聞きました。

音楽堂 先生のためのアウトリーチ

音楽にふれる機会をより多くの人に届けるために、ホール以外の場所に訪問し、公演やワークショップを行う「アウトリーチ」活動。2021年から小中学校の先生に向けた取り組みを開始しました。プロのアーティストが、県内各地の教員が集まる研究会に赴き、音楽教育へのヒントとなるワークショップやディスカッションを行っています。プロデューサーの日下さんは、「技術向上や指導方法などの先生方の具体的な悩みを解決していくことも大切ですが、この事業の一番の目的は、音楽の楽しさや音楽にふれる喜びを、先生を通じて、子どもたちに伝えていきたいということ。そのために、先生たちに体験してもらい、その先の子どもたちに伝えていく方法を一緒に考えていく。そんな思いで、アーティストたちと試行錯誤しながら、実際の授業に活かせるようなヒントを盛り込んだプログラムを考えています」と話します。



「先生のためのアウトリーチ研修会」のワークショップの様子

「先生のためのアウトリーチ研修会」がメインでしたが、例えば小学校の先生など、音楽が専門教科ではない方々にも参加いただけるよう、個人単位で募集しました。アウトリーチへのフィードバックはもちろん、それ以外の様々な要望にもできるかぎり応えていきたい。私たちが先生たちの相談役のようになっていけるといいなと思っています」



REGULAR FEATURE

本誌では、毎号以下のコンテンツをお届けします。

アートシーンプレイバック

劇場とアーティスト発の意欲的な企画が繰り上げられた「ダンスプログラム」と、
県民ホール休館前最後のコンサートから映画音楽の巨匠によるライブまで、
多様な演目が注目された「音楽プログラム」から、
県内の2025年上半期のアートシーンをふりかえります。



つなぐ — 社会と芸術

あらゆる人たちが芸術文化に親しむことができるよう、
神奈川県内の文化施設や団体では様々な取り組みを行っています。
インクルーシブなアプローチを中心に、社会と芸術をつなぐ事例をご紹介します。



公演の舞台裏

普段は縁の下の力持ちとして様々なかたちで公演を支え、
「舞台裏」で活躍するスタッフの技術やその仕事について取り上げます。
今回は[アクション編]をお届けします。

アートシーン ▶ プレイバック

2025年上半期のダンスプログラムをふりかえる

意欲的な劇場企画とアーティストたちの自由な発想が交差し、新たな地平が拓かれた2025年上半期。
神奈川県内で繰り広げられた多彩な創造と実験の現場を、ピックアップしてふりかえります。

文：呉宮百合香（舞踊評論）



(c) Hidemi Seto

ありがとう神奈川県民ホール

『Jewels from MIZUKA 2025』

ジュエルズ・フロム・ミズカ 2025

神奈川県出身のバレエダンサー上野水香がプロデュースする本企画は、2014年・2018年に続き3回目の開催となります。新作初演も充実し、なかでも岡崎隼也「春の祭典」の風刺性とジル・ロマン『あなたへ……～for you～』の円熟味は際立っていました。上野自身はモーリス・ベジャールの『ルナ』に初挑戦し、荘厳な美と輝きで観客を圧倒。3月末をもって50年の歴史に幕を下ろす劇場への感謝と未来への祈りが込められた、宝石箱のように煌めくプログラムでした。

会場 | 神奈川県民ホール 大ホール
日程 | 2025年3月8日
主催 | 神奈川県、神奈川県民ホール



(c) 前澤秀登

Co.山田うん『遠地点』

和紙を用いた3部作の最終章。『EN』『TEN』での蓄積が12名の大掛かりな群舞に発展しました。包み、折り、広げ、自在に姿を変える紙と身体が響き合い、舞台上、時には客席上空にまでダイナミックな運動が広がります。行為の痕跡は墨の跡や皺として紙上に刻まれ、その音自体も音楽の一部に。人々の動きは社会活動の縮図のようでもあり、抽象性のなかに土の香りが漂います。終盤、白の大地が反転して色彩が一面に現れる瞬間は圧巻でした。

会場 | KAAT 神奈川芸術劇場 大スタジオ
日程 | 2025年1月25日、26日
主催 | 一般社団法人 Co.山田うん

2025年上半期は、拠点劇場による意欲的な企画と、アーティストたちの場の開拓が大小様々に結実した半年となりました。

KAATでは、劇場エントランスを大胆に活用した「KAATアトリウムプロジェクト」を実施。休憩等に訪れた市民にも新たな舞台芸術体験を提供しました。続く7月には、ストラスブル・グランテスト国立演劇センターとの国際共同制作『ダンスマラソンエクスペレス（横浜花巻）』が世界初演を迎えました。宮沢賢治を題材に、日仏両劇場の芸術監督、長塚圭史と伊藤郁女が協働した注目作です。ほかにもCo.山田うんやOrganWorksといったカンパニーとの提携公演も充実し、劇場空間から立ち上がる創造のダイナミズムが存在感を放ちました。

横浜赤レンガ倉庫1号館では、ダンス・音楽・美術を織り交ぜて観客とともにつくる近藤良平×永積崇『Great Journey』が8回目を迎え、名物企画として定着しつつあります。加えて、24年度から同館振付家に就任した小尻健太による育成・開発プログラム「Sand LAB. 2025」を実施。ホールを創作と上演両方の場として使いながら、総合芸術としてのダンスの可能性を広げています。



岡本優パフォーマンス 写真：木村雅章

KAATアトリウムプロジェクト

KAATの新企画として、山本貴愛が劇場エントランスを舞台美術の視点でデザイン。雨をテーマに、円形のオブジェと床に広がる波紋、宙に吊られた棒形のオブジェで構成された白の空間は、静謐な緊張感を湛えています。6月の週末には5組のアーティストによるパフォーマンスも実施。人の行為によって命を吹き込まれる舞台美術——その束の間の虚構が生を宿す瞬間が、日常風景に小さな異化と祝祭をもたらしていました。

会場 | KAAT 神奈川芸術劇場 アトリウム

日程 | 2025年4月24日～6月14日

主催 | KAAT 神奈川芸術劇場

「育成」は今期の大きなキーワードです。5周年を迎えたDance Base Yokohamaでは、若手クリエイターの海外展開プロジェクト「Wings」を開始。さらに8月には、新スタジオもオープンしました。STスポットは新レジデンス「迂回スケープ」を立ち上げ、出入り自由のオープンスタジオを通じて、探求や実験の過程そのものを公開する新たな舞台芸術の楽しみ方を提案しています。歴史あるダンスショーケース「ラボ20」は24回目を迎え、康本雅子のキュレーションで4組が上演を行いました。レジデンス機能をもつ若葉町ウォーフによる「若葉町ウォーフダンス工房」は、都市型滞在制作の可能性を切り開く新企画。神奈川県立

青少年センターは、「紅葉坂舞台塾」青少年の舞台表現のためのスキルアップクラス」など次世代向けのプログラムが充実し、舞台衣装のクラスなど多様な関心に応える内容も魅力となっています。誰もが参加し楽しめる企画も増えてきています。休館直前の県民ホールでは、安藤洋子とシニアによる「チャレンジ・オブ・ザ・シルバー」の公演『Argo』を開催。小田原発の「スクランブル・ダンスプロジェクト」は、関内ホール・吉野町市民プラザ・岩間市民プラザと連携し、インクルーシブダンスのワークショップと公演を実施しました。アーティスト主導の機動力ある企

画も光ります。日ノ出町駅近くにオープンしたワイキキSTUDIOは、レクチャーシリーズ「コンテンツポラリィダンスの門前」などオルタナティブ性を活かした企画を展開。横須賀の古民家・飯島商店でのAokid×たくみちゃん『フォアポール!!』や、茅ヶ崎の農園での熊谷拓明のダンス劇、グランモール公園での新人Hソケリッサ！×伊藤キム『Super Stranger』は、その場所ならではの特別なダンス体験を生みだしています。変化を恐れず、多様な場と表現を追求し続ける神奈川のダンスシーンに、ますます期待が高まります。

DANCE

別会場でのリハーサル風景 写真：おもち合唱団



踊る『熊谷拓明』 カンパニー ダンス劇 『カサブタとタイヨウ』

「ダンス劇春のtour2025」と題し、4作品を携えて沖縄から札幌まで全国9都市をめぐる熊谷拓明。茅ヶ崎公演では、会員制農園併設の和室にてデュオ作品『カサブタとタイヨウ』を上演しました。至近距離で展開するダイナミックなコンタクトワークは迫力満点で、人間の繊微に満ちています。敷居は低く、奥行きは深く。言葉を用いながら、日常と地続きの時間のなかに身体自体がもつ豊かなドラマ性を立ち上げる手腕が光りました。

会場 | RIVENDEL

日程 | 2025年5月31日

主催 | 踊る『熊谷拓明』カンパニー

2025年上半期の音楽プログラムをふりかえる

県民ホール休館前に様々な催しが繰り広げられた2025年上半期。神奈川県内ではほかに、ダイナミックな演奏が目されたオペラ、映画音楽の巨匠によるライブなど、バラエティー豊かなプログラムがみられました。

文：八木宏之（音楽評論）



写真：阿部章仁

フィナーレコンサート『ありがとう神奈川県民ホール』

会場には黒岩祐治知事も訪れ、県民ホールの建て替えを県民とともに推し進めていく方向性を示しました。コンサートのクライマックスにはシンガーソングライターの白井貴子がスペシャル・ゲストとして登場。白井が「21世紀の新しい神奈川の合唱曲」として2001年に作曲した《ふるさとの風になりたい》を出演者と観客全員で歌い、新たに生まれ変わる県民ホールへの希望を皆で分かち合いました。

会場 | 神奈川県民ホール 大ホール 日程 | 2025年3月31日 主催 | 神奈川県、神奈川県民ホール



写真：阿部章仁

《オルガン avec シリーズ vol.3》『オルガン avec テアトル』

『海底二万里』や『八十日間世界一周』『十五少年漂流記』などの冒険小説で知られるジュール・ヴェルヌですが、『レのシャープ君とミのフラットさん』（1893）では、教会のパイプオルガンをめぐる不思議な体験と初恋の記憶が描かれ、この小説家の普段とは異なる表情を垣間見ることができます。小説の幻想的な世界のなかで聴くバッハやフランクの作品は、オルガンになじみのない人でも自然に楽しむことができる、新たな音楽体験となりました。

会場 | 神奈川県民ホール 小ホール 日程 | 2025年2月8日 主催 | 神奈川県民ホール

MUSIC

1975年の開館以来、半世紀にわたって神奈川県民の音楽、舞台芸術の発展を支えてきた県民ホールが、3月末日をもって休館となりました。営業最終日の3月31日には、フィナーレコンサート『ありがとう神奈川県民ホール』が開催され、松尾葉子指揮する神奈川県フィルハーモニー管弦楽団（以下、神奈川県フィル）や県内の合唱団のほか、構成・司会も務めたバリトンの宮本益光、ソプラノの塩田美奈子、ヴァイオリンの石

田泰尚（神奈川県フィル首席ソロ・コンサートマスター）、ピアノの實川風ら、県民ホールゆかりの演奏家たち（演奏から編曲まで多彩な活躍を見せた實川のみ、この日が県民ホールデビュー）が大ホールのステージに集いました。ビゼーやレハールによるオペラ、オペレッタの名場面や、シャブリエ、ピアソラ、ムソルグスキーの傑作が次々と披露されたコンサートはアットホームな雰囲気にも包まれ、ステージと客席が一体となって県民

ホールとの別れを惜しましました。休館に先立って、県民ホールでは様々な催しが行われましたが、2月8日に開催された『オルガン avec テアトル』は、小ホールに設置されている県民ホール自慢のオルガンをじっくりと味わう、特別な機会となりました。県民ホールのオルガン・アドバイザー、中田恵子のプロデュースによる本公演では、フランスの作家、ジュール・ヴェルヌの

濱田芳通&アントネッロ モンテヴェルディ オペラ『オルフェオ』

「音楽堂室内オペラ・プロジェクト」の第7弾として上演されたモンテヴェルディの『オルフェオ』は、2023年に取り上げられたヘンデルの『ジュリオ・チェザレ』に引き続き、バロック・オペラが21世紀にもなおエンターテインメントとして聴衆を熱狂させ得ることを示すものとなりました。主役だけが強烈な印象を残すのではなく、すべてのキャストとオーケストラが大きなアンサンブルを形成することで、作品に立体感をもたらされました。これは、濱田芳通の類い稀なリーダーシップと明確なビジョンあつてのものでしょう。

会場 | 神奈川県立音楽堂 ホール
日程 | 2025年2月22日、23日
主催 | 神奈川県立音楽堂

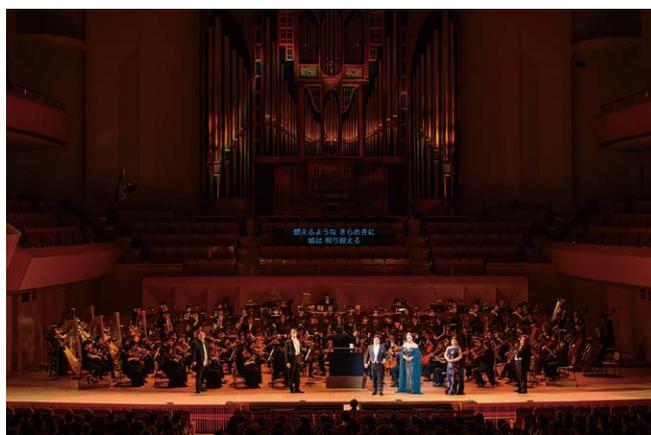


(c) Tomoko Hidaki

Dramatic Series 楽劇『ラインの黄金』

神奈川フィルは、音楽監督の沼尻竜典とともに、ワーグナーの楽劇「ニーベルングの指環」の序夜『ラインの黄金』をセミ・ステージ形式で上演し、圧巻の演奏を披露しました。ワーグナーが望んだとおりの、100人を超える大編成ながら、神奈川フィルの響きは驚くほどクリア。火の神、ローゲを演じた澤武紀行の熱演も、公演の成功に大きく貢献しました。これからも沼尻と神奈川フィルの「横浜リング」に注目です。

会場 | 横浜みなとみらいホール 日程 | 2025年6月21日
主催 | 神奈川フィルハーモニー管弦楽団

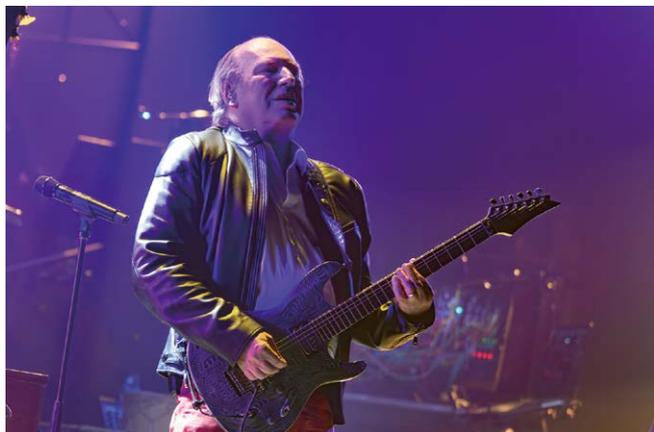


写真：藤本史昭

『ハンス・ジマー ライヴ』

アカデミー賞2回、ゴールデングローブ賞3回、グラミー賞5回という輝かしい受賞歴を誇るハンス・ジマーは、1990年代以降の映画音楽の一つの様式を打ち立てた作曲家です。映像がなくとも、映画の世界を聴き手の眼前に浮かび上がらせるジマーの音楽表現の凄まじさを、あらためて思い知らされる一夜となりました。

会場 | びあアリーナMM 日程 | 2025年5月20日 主催 | AEGX



写真：Masanori Naruse

小説『レのシャープ君とミのフラットさん』を俳優のウエンツ瑛士とともに音楽とドラマリーディングで上演。構成、演出の田丸一宏の演出は、公立ホールオルガンとしては最も古い歴史をもつドイツ、クライス社製のオルガンを舞台装置として巧みに活かすもの。ウエンツの軽妙洒落な語り口と、中田が紡ぐ時に重厚で時に流麗なオルガンの調べは、観客を非日常のファンタジックな世界へと誘いました。

音楽堂では、開館70周年を記念して、『モンテヴェルディのオペラ』『オルフェオ』が上演されました。演奏を担ったのは濱田芳通率いるアントネッロ。演出の中村敬一は、このオペラに初めて接する人にもしっかりと寄り添い、奇を衒うことなくストレートに作品の魅力を引きだしました。坂下忠弘（オルフェオ）、岡崎陽香（エウリディーチェ）、中山美紀（ムジカ/プロゼルピナ）、彌勒忠史（メッサジエーラ）ら歌手陣の真に迫る研ぎ澄まされた歌唱と、濱田の指揮するアントネッロの躍動感に満ちたダイナミックな演奏は、400年以上前に書かれたオペラに新たな命を吹き込み、客席をスタンディング・オベーションの熱狂へと導きました。

神奈川県では、神奈川フィルの

ほか、東京交響楽団や日本フィルハーモニー交響楽団、東京都交響楽団など、様々なプロ・オーケストラが定期演奏会や特別演奏会を開催しています。また夏になると、ミューザ川崎シンフォニーホールに全国のオーケストラが集う『フェスタサマーミュージック KAWASAKI』が行われるなど、県内でオーケストラを楽しむ機会は実に豊富です。

オペラの名指揮者として知られる音楽監督、沼尻竜典のもとスタートした、神奈川フィルの演奏会形式オペラ・シリーズ「Dramatic Series」は、近年の特に注目すべき試みで、6月には満を持してワーグナーの楽劇が取り上げられました。

5月20日には、横浜のびあアリーナMMにて、映画音楽の巨匠、ハンス・ジマーのライブが開催されました。ジマーが日本でライブを行うのは今回が初めて。関東圏での公演は横浜のみということもあり、多くのファンがみなとみらいに駆けつけました。『グラディエーター』『パイレーツ・オブ・カリビアン』『ラストサムライ』『ライオン・キング』など、数々の名作を彩ったジマーの音楽が大迫力の音響で披露され、演奏が終わるたびに会場からは大歓声が沸き起こりました。



「チャレンジ」プロジェクトリーダーの安藤洋子さん

『チャレンジ』が、海外に行ったという感覚はないんです。どこの国・地域も、抱える問題は同じだと思っ

方たち一人ひとりと表現を通じて深く向き合ってきた安藤さんは、今回のドイツでの活動について、そう切り出しました。

と人とが繋がっている実感を感じ、ア世代が体現し、次の世代へと残すこと。生き様を見せる責任が、シニア世代にもまだまだあると思っ



聞き手・文：編集部
写真：加藤 甫(*を除く)

文化による豊かな交流を —「チャレンジ・オブ・ザ・シルバー」 ドイツに展開

● 神奈川県 共生共創事業 「チャレンジ・オブ・ザ・シルバー」 ●

「ともに生きる社会かながわ」の実現を目指す神奈川県は、年齢や障がいなどにかかわらず、すべての人が舞台芸術に参加し、楽しめる「共生共創事業」に取り組んでいます。

● 芸術の祭典「欧州文化首都」 (ドイツ・ケムニッツ市)での創作・発表 ●

「欧州文化首都」のプロデューサーによる「チャレンジ」の視察をきっかけに、神奈川県での取り組みをモデルケースとした、ケムニッツ市のシニア世代(約50名)とのワークショップが実現しました。

芸術の祭典「欧州文化首都」でのワークショップ
* Photo: Peter Rossner / Chemnitz 2025 gGmbH



公演の裏舞台

アクション編

聞き手・文：尾上そら 写真：大野隆介(*を除く)

※本インタビューのロングバージョンはWEBに掲載しています。

アクション

前田 悟

[まだ・さとる] 1995年『忠臣蔵ブートレック』以降14年にわたり劇団☆新感線のほぼ全作品に出演。舞台出演にとどまらずアクション指導として数多くの作品に参加するなど幅広く活躍。KAATにて2022年『夜の女たち』、2025年『花と龍』（いずれも長塚圭史演出）でアクション指導。



前田さん(左)、木刀とトレーニングの道具(中央)、前田さんがアクションを手がけた『花と龍』公演写真(右) *写真：宮川舞子

舞台作品の上演を、確かな技術と豊富な経験から得た知識で支えるプロ中のプロ。そんな舞台スタッフの仕事を探る本コーナー。今回はKAAT芸術監督である長塚圭史演出のミュージカル『夜の女たち』や『花と龍』で、アクションを手がけられた前田悟さんをお迎えします。舞台と演者の身体をあらゆる角度から結ぶ仕事、そのこだわりとは？

——前田さんがアクションを仕事にしようと決めたきっかけは？

小学生の頃にはすでに、「アクションの仕事をした」と思っていました。すぐにでもプロの道へと思ったのですが、「高校だけは出てくれ」と親に言われて(笑)。高校在学中から少林寺拳法部の先輩の紹介で、キャラクターショー(イベントや遊園地などでアニメや特撮物のキャラクターの着ぐるみを着た俳優が行うショー)のバイトをしていて、そこから今の仕事につながった感じです。

——自衛隊員だったとも伺いました。

高校卒業後、すぐ自立したかったので選んだ就職先です。オートバイに乗る偵察部隊に配属されたんですが、上官に声をかけられてレンジャー訓練も受けました。格別厳しいものですが、ロープ訓練などは忍者ショーの仕事に役立ちました(笑)。

自分のアクションは部活や自衛隊の訓練、ショーなどでの実践で身につけたもので、体系的に学んだ経験はありません。

——手がけられた『花と龍』には船のような形の回転するセットを中心に、港灣労働者・ゴンゾの荷揚げや乱闘など様々なアクションがありました。

まず稽古を見せていただいた時、ちようど木炭の荷揚げをする場面をやっている。それを見て、「もっと重さを感じた身体でいた方がよいのでは？」と提案させていただきました。一日中重いものを上げ下ろしするプロですから、その動きにはけがを防ぐようなコツがあるはず。それを始めにケンカや組同士の抗争など集団で動くシーン、証書を奪い合う場面で大勢のなかでいかに紙一枚が目がいくように扱うかなどを考え、つくることが難しいけれど面白い作業でした。

——前田さんが考える、アクション指導に必要な資質はどんなものですか。

大切なのは「人」でしょうか。基本、人が好きなんです。作品をつくりながら相手を尊敬できる瞬間があれば言うことはないですし、自分も相手の方に信頼してもらって、安全でカッコよく、なおかつリアルに見えるアクションと一緒につくられたら最高だと思っています。



紀州の風

×

完全フル装備の家®

「完全フル装備」のハイグレードな設備も標準装備で叶えます。

紀州ひのきの香とぬくもりを感じる上質な家づくり

紀州産の4寸角の柱・土台でより強固な住宅に。

調湿機能 強靱な硬さ 抗菌効果

樹齢60年以上の檜だけを使用。



詳しくはコチラ！



神奈川芸術プレス 読者アンケート

神奈川芸術プレス(vol.167)をお読みいただき、ありがとうございます。アンケートにお答えいただいた方の中から、抽選で1組2名様を、2026年2月17日(火) KAAT 神奈川芸術劇場プロデュース『未練の幽霊と怪物』(KAAT 神奈川芸術劇場(大スタジオ))にご招待いたします。今後の誌面づくりに活かすため、ぜひご意見・ご感想をお寄せください。

なお、開演時間については、当選のお知らせの際にご連絡させていただきます。

- アンケート項目
1. 神奈川芸術プレスはいかがでしたか。ご意見・ご感想を教えてください。
 2. 今号で印象に残った記事を教えてください。
 3. 次号以降、読んでみたい特集テーマがあれば教えてください。
 4. 今気になっている「ひと」や「こと」、「場所」などがあれば教えてください。
 5. 神奈川芸術プレスをどちらで入手に取りましたか?

応募方法: 「WEBアンケートフォーム」もしくは「はがき」に、アンケートの回答とメールアドレスを明記のうえ、ご応募ください。

WEBアンケートフォーム: <https://krs.bz/kanagawaaf/m/kap167q>

はがき郵送先: 〒231-0023 横浜市中区山下町3-1

公益財団法人 神奈川芸術文化財団 神奈川芸術プレス読者アンケート係

回答期限/はがき必着: 2025年11月28日(金)

当選発表: 厳正なる抽選のうえ、当選者の発表はメール送信をもってかえさせていただきます。

- ・当選に関するお問い合わせには回答いたしかねます。
- ・当選通知メールは、kaf@kanagawa-af.orgのアドレスから送付予定です。上記ドメインからのメールを受信できるよう、設定をご確認ください。
- ・メールアドレスの間違い等でメールが送信できない場合は、当選を無効にさせていただきます。※お申し込み時にいただいた個人情報、当選通知以外の目的には使用いたしません。



WEBアンケートフォームはこちら

今号のプレゼント



KAAT 神奈川芸術劇場プロデュース
『未練の幽霊と怪物—「珊瑚」「円山町」—』

能のフォーマットを応用し、ついでた「夢」を幻視する、レクイエムとしての音楽劇

作・演出: 岡田利規
音楽監督: 内橋和久
出演:
アオイヤマダ 小栗基裕(s**t kingz) / 片桐はいり ほか
隠手: 里アンナ 演奏: 内橋和久



公演の詳細はこちら

ご支援のお願い

神奈川芸術文化財団は、心豊かな芸術文化の創造に寄与するとともに、神奈川の地から世界に向けてその発信を回することを使命として活動しております。活動の継続にはご支援が大きな支えになります。皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

- 賛助会員: 1年を通じて事業全般にご支援をいただきます。個人賛助会員: 30,000円(1口/1年) 法人賛助会員: 100,000円(1口/1年)
- 個別協賛: 当財団が主催する特定の公演・事業にご支援をいただきます。個人: 30,000円~ 法人: 100,000円~
- オンライン小口寄付: 1,000円からクレジットカードで気軽に寄付いただけます。

賛助会員の特典

- ご芳名を掲載します。○財団主催公演のなかから選定した公演にご招待いたします。○主催公演のチケットを10%引きでご購入いただけます。○限定イベントにご招待いたします。
- 神奈川芸術プレス(年2回発行)をお送りします。○最新のチケット情報をメールでお送りします。

お問い合わせ・お申し込み

公益財団法人 神奈川芸術文化財団 経営企画課 <https://www.kanagawa-arts.or.jp/support> 電話: 045-222-0551(9:00~17:00/土日祝日・年末年始を除く)

公益財団法人 神奈川芸術文化財団 賛助会員・協賛・協力・寄付 ご芳名

五十音順・敬称略(2025年9月1日現在)

【賛助会員】

法人賛助会員: 株式会社アクトエンジニアリング / アズビル株式会社 / 学校法人岩崎学園 / 株式会社ヴォートル / 株式会社エス・シー・アライアンス / 株式会社NHKアート / 鹿島建設株式会社横浜支店 / 株式会社勝烈庵 / 一般財団法人神奈川県教育福祉振興会 / 株式会社神奈川孔文社 / 株式会社神奈川保健事業社 / 神谷コーポレーション株式会社 / カヤバCS株式会社 / 川本工業株式会社 / 株式会社共栄社 / 株式会社KSP / 株式会社合同通信 / 株式会社ジェイコム湘南・神奈川 / 株式会社清光社 / 株式会社テレビ神奈川 / 東工株式会社 / 日成工事株式会社 / 日生商工株式会社 / 日総ブレイン株式会社 / 日本発条株式会社 / パナソニックEWエンジニアリング株式会社 / Piascore株式会社 / 平安堂薬局 / 株式会社ホテル、ニューグランド / 一般社団法人本牧関連産業振興協会 / 丸茂電機株式会社 / 三沢電機株式会社 / 森舞舞台機構株式会社 / ヤマハサウンドシステム株式会社 / 株式会社有隣堂 / 株式会社豊商会 / 株式会社ユニコーン / 株式会社横浜アーティスト / 横浜信用金庫 / 弁護士法人横浜パートナー法律事務所 / 横浜ビルシステム株式会社 / 株式会社ワイイーシーソリューションズ / 匿名 3社

永年個人賛助会員: 延命政之 / 小山明枝

個人賛助会員: 味田健一 / 小川 浩 / 黒瀬博晴 / 柴田彩友美 / 鈴木真由美 / 高岡俊之 / 高野伊久男 / 田中浩司 / 戸張 実 / 中澤守正 / 橋本尚子 / 松森 繁 / 御園生和彦 / 山口健太郎 / 匿名 4名

【協賛・協力・寄付】

能舞台協賛: ナイス株式会社

個別協賛: ACO FOREST / アクセンチュア 芸術部 / Accenture Art Salon / 株式会社ルーク / 匿名 1社

協力: 株式会社崎陽軒 / 株式会社富士住建

一般寄付: 一柳清子 / 定金誠一郎 / 匿名 1名

神奈川芸術プレス vol.167 発行: 公益財団法人 神奈川芸術文化財団 TEL: 045-222-0551

2025年(令和7年)9月24日 発行

企画・制作: 公益財団法人 神奈川芸術文化財団、株式会社ボイズ

編集: 安部見空・小林璃代子・及位友美(voids)

デザイン: 岡部正裕(voids) + 三浦佑介(shubidua) イラストレーション: 白尾可奈子 校正・校閲: 聚珍社 印刷: 深雪印刷

神奈川芸術プレス
WEB版はこちらから



【禁無断転載・複写】無料配布

※本誌掲載情報は2025年9月16日現在のもの